¡Hola, amigos!

第１００号（最終号）

（ＲとＮの Cádiz からの手紙）

この長い手紙もとうとう１００号になりました。ご愛読を続けてくださった皆さんには申し訳ありませんが、今回限りで終了とさせていただきます。次週以後は古いものから１号ずつ削除して４週後には完全消去といたします。

なお、今後、手紙の続きをメールにて不定期に発信しようと思っています。配信ご希望の方はＲかN宛てにメールでお知らせください。

長らくのご愛読本当にありがとうございました。ごきげんよう。さようなら。

２００６年０３月１７日　カァディスにてＲ ｙ Ｎ

☆今週号のトップへジャンプ

現在有効なバック・ナンバーは０９９号(０３月１０日)、０９８号(０３月０３日)０９７号(０２月２４日)の三週分です。各週のトップにあるボタンからどうぞ。

＊最終号＊ No. 100（2006 年・第 11 週） ０３月１７日更新

「再び国境の町」の巻

短い旅の三日目、往きには殆ど素通りだったポルトガル・スペイン両国の国境の町を帰りがけにもう少し良く見ていこうと思って早めにチェックアウトしました。

勘定書は一泊税込み２４ユーロ×２、朝食一人３ユーロ×４、合計６０ユーロ、となっていました。全く安い！ 心配していた朝食もクロワッサン一個とコーヒーだけではなく、質素ながらも一応バイキング形式で野菜・果物もあって満足。

ホテルのあるモンテ・ゴルドから国境のビラ・レアルまではバスで２０分足らず。私達がバスに乗り込んだ８時半は通勤通学の乗客で一杯でした。それでも大半の客は途中の新市街中心部と大きな学校の前で降りてしまい、終点のフェリー乗り場まで乗っていたのは、ドイツ人らしい数組のペンショニスタ夫婦と私達だけでした。

バスを降りた私達が、さて、どこをドウ歩こうかと思案していると、いったんフェリー乗り場の方へ行きかけていた或る夫婦が戻ってきて、フェリーに乗るんだったら急がないとすぐ来ますよ、と教えてくれました。私達が地理不案内のように見えたんでしょうね。その奥さんのほうがバスを待っている間、Ｎと隣りあわせで２～３言葉を交わしていたようだし、見慣れない日本人なので気に掛けてくれたんでしょう。

ありがたく礼を言って私達は旧市街へ、その人たちは顔見知りらしいほかのドイツ人と一緒にフェリー乗り場へ・・・。その朝、フェリー乗り場の周りは正にドイツ租界の様相を呈していました。バスに乗っていた数組の夫婦のほかに、１０数台の自転車の群れ、その他大勢のドイツ人が集まって賑やかに話していました。

マリーナ沿いの遊歩道。言わば旧市街の顔の部分。右端の赤屋根がフェリー乗場。

マリーナから上流を見る。右端がアヤモンテ。中央にフェリー、ずっと上流に橋脚。

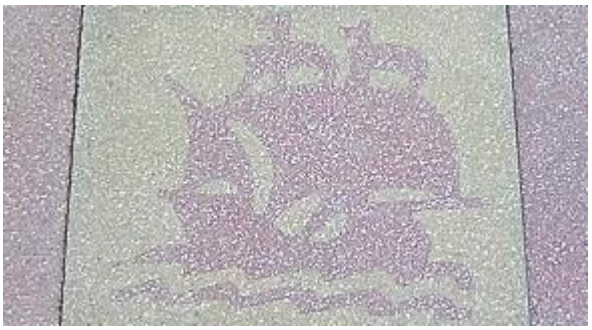
これはマリーナから下流を見たところ。左の低い陸地がスペイン、右がポルトガル。その間が河口で、ここから見える水平線の向うは大西洋です。

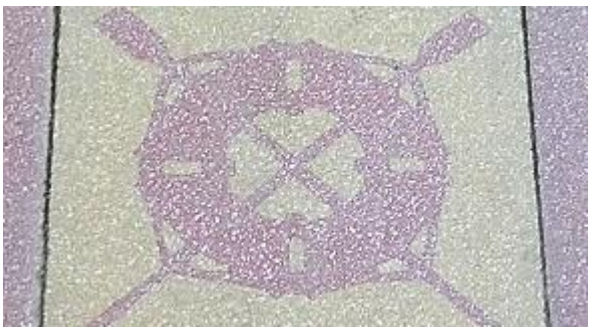
カァディスからファーロにかけての Golfo de Cádiz(ガルフ・オブ・カァディス) に注ぐ河はいずれも古くから航海者にとって天然の良港として利用されてきた筈です。この Rio Guadiana リオ・ガディアーナ、ウエルバのリオ・ティントとリオ・オディエール、セビージャのリオ・ガダルキビールなど。個々の歴史は良く知りませんが、いずれもフェニキア人に始まって、ローマ人、ムーア人などによって港として利用されてきた筈。そしてそれはそのまま大航海時代に受け継がれ、新世界からほしいままに略奪してきた物資の陸揚げに一役買ったに違いない。

セビージャやウエルバの河が現在も商港としての機能を保っているのに較べるとこの河はヤヤ低調。現在、漁港として利用されているほかはプレジャー・ボート用のマリーナが設置されているだけです。一時は水揚げの大きい漁港だったのでしょうが、近年の沿岸漁業はいずこも同じで、不漁にあえいでいるらしいテレビニュースも見ました。この河の両岸の漁港は西・葡とも同じように、活気が感じられませんでした。

敷石の模様。左はご存知コンパス・マーク。右は錨。全て海に関係するものばかり。

これは海老でしょうねー。ポルトガルの敷石は右のように真四角に切った石を敷き詰める独特のもの。そして個々の石はセメントなどで固めてないので隙間からはこんな風に草が生えたりしています。滑りにくい代わりにつまずくこともありそう。





こちらはホコテン商店街の絵タイル。ここでも海に関する図案ばかり目立ちました。どうも、スペイン側の町アヤモンテよりポルトガル側の方が海に親しんでいるような印象を受けます。スペインの町ではムーア人の残した敷石にコンパス・マークを見たことがありますが、これほど海関係の図案ばかり集めた町は記憶にありません。

足元ばかりじゃありません。こんな風に「水平線」Horizonte というカフェがあったり「航海者達」Navegadores というホテルがあったり、嬉しくなってしまいます。歴史に名を残す誰にでも知られた航海者となると、コロンブス、マゼラン、バスコ・ダ・ガマ、クックなどがあると思いますが、マゼランもガマもポルトガル人です。一方スペイン人航海者はファン・セバスティアン・エルカノ位で、それとても日本ではあまり知られた名前ではありませんね。大航海時代の幕開けにはマゼランやイタリー人コロンブスさえもスペインの君主の援助を受けて探検航海に乗り出し、その後新世界から富の略奪をしまくったスペインの先棒を担いだ形になってしまった。

日本に鉄砲を伝えたのもポルトガル人。要するに探検航海にかけてはポルトガル人のほうが長じていたみたいだけれど、スペインはウマクその上前をはねたか。当時のスペインはかなりしぶとくコスっからい国だったようですね。

何かの本で読んだ記憶ですが、コロンブスに援助を与えたイサベル女王は、ユダヤ系の臣下の進言でソレを決心したらしい。また当時のスペインの或る王家にはユダヤの血も混じっていたらしい。コロンブス本人も隠れユダヤだったとする説もあるようです。真偽のほどは全く知りませんヨ。ユダヤじゃイカンというわけでもないしね。けれども、西・葡両国の植民地を較べると前者が圧倒的に多かったのは事実です。元々の国力の違いだと言ってしまえばそれまでですが、前者のほうがヨリ強欲だったのではないでしょうか。大航海時代の初期、スペインとポルトガルは世界を二分する勝手な条約を取り決めましたがこの場合もスペインにしてやられた感じが強い。

話は飛びますが、コロンブス・デイ・ストームといって４０年位前の１０月１２日に合衆国オレゴン州沿岸を大時化が襲いました。Ｒがまだ駆け出し航海士の頃でしたが海上は勿論陸上でも大きな被害をもたらした大低気圧でした。
その後何年も経ってから、やはりその同じ日にコロンビア・リバーをポートランドに向かって遡っていました。その日のパイロット(水先人)は褐色の肌色の人でしたが、彼との雑談の中で「今日はコロンブス・デイですね、昔この日にひどい時化にやられた事がありますよ」と何気なく言うと「コロンブス・デイ？　ケッ、あんなもの！」という意外な反応に驚きました。勿論当方に腹を立てたわけではなく、コロンブスが新大陸を発見したとされる記念日を、先住民族の子孫である彼は快く思っていなかったんですね。「私はシャイアンだ」とその後ポツポツ話始めました。合衆国政府の先住民族に対する扱いに深く傷ついている様子がアリアリと窺えました。

また、モザンビークが独立する前、ナカラ、ベイラ、ロレンソ・マルケスなどの港へは何回か行きましたが、当時のポルトガルの植民政策も決してほめられるようなものではありませんでした。貨物の積み下ろしをする荷役人夫は現地人、それを仕切る人夫頭など主だった役はポルトガル人なんですが、ソレはもうひどい扱いでした。
現地人人夫が疲れて動きが鈍くなったりすると、長い皮の鞭でバシッ・バシッと音を立てて威嚇して気合を入れるのです。さすがに、マトモに鞭で叩くところは見たことはありませんでしたが、映画で見る奴隷の扱いと同じでビックリしたものです。

その後、何年かして行ったときは、独立運動が盛んになって各地でゲリラが活発に活動していました。ポルトガル政府軍は古い客船をチャーターして兵士を乗せ、各地を転戦しているようでした。ろくな道路もない陸上を移動するのは時間が掛かるので海上を素早く移動しようとしたのでしょう。しかしそれでは全面制圧は出来ませんね。

各地でポルトガル人入植者が散発的に集団虐殺されているという話も聴きました。

更に何年後かに行った時は既に独立国になっていて、各港からポルトガル人は一掃されていたし、ロレンソ・マルケスという港名もマプートと変わっていました。

強国のやりたい放題の裏では常に弱者の怨念がくすぶり続ける図式は今も同じ。

この国境の町はヒッソリと沈んだ町という印象です。特に川べりの旧市街は一歩裏通りに入ると道行く人も少なく、過去の町という感じがしました。この市庁舎前の広場を囲んでバルが数件ありましたが閑散としていました。広場の右手ではカルナバルの行事に使うらしい舞台づくりをしていました。日本でももうあまり見かけない赤い円筒形の郵便ポストが懐かしい。さて、ソロソロ次のフェリーの時間。

私達が乗ったアヤモンテ行きのフェリーは、３０人位の乗客の大半をやはりドイツ人が占めていました。貸し自転車らしいのに乗った人も大勢いましたから。モンテ・ゴルドのホテル群の長期滞在客が日帰りでスペインに遊びに行くらしい。

左は国境の川を渡るフェリーの切符。切符は乗船の時乗組員に渡してしまうんですが記念に欲しいというと隅をちぎってから返してくれました。１．３ユーロで国境を越えるのはかなりの安値ですね。

コレまでに私達が一番安い国境越えをしたのはジブラルタルへ行ったときでした。何しろ自分の足で歩いてでしたからタダです。勿論ソコへ行くまではバスでですが、国境そのものは歩いて越えました。オマケに国境を越えるとすぐ飛行場の滑走路を歩いて横断しました。滑走路に遮断機があって、飛行機の離着陸の時以外は自由に横断できるんです。小さくはありますがとにかく旅客機や軍用機が発着する飛行場ですよ。

車はともかく歩行者も横断させるなんてトコは他にはないでしょうね。

私達にとってはウエルバは全く魅力のない町でしたから復路はウエルバ経由ではなくアヤモンテからセビージャ直行便のバスに乗ることにしました。右の切符がセビージャ直行のものですがご覧のとおり正規運賃１０．３２ユーロがＲは半額の５．１６ユーロです。晩酌ヴィノ２本買えちゃいます。又来る時はウエルバ乗り継ぎでセビージャ～ウエルバが６．７５、ウエルバ～アヤモンテが４．２５でトータル１１ユーロでしたから直行便のほうが早くて楽でしかも安い。個人単位での旅の楽しみはこういうチマチマしたことを知ることも楽しい。ソレを楽しいと思エないと行き当たりばったりの個人の旅は効率が悪いだけになってしまいます。バスの時間まで往きには殆ど素通りだったアヤモンテ見物をするつもり。再び、往きにも寄った観光案内所へ。

もう顔なじみになったオニーさんに、バスターミナルにはコインロッカーがあるかどうか聞きました。アル、というのでひとまずリュックを預けに行きました。案内所からバス駅までは約２０分、この距離を往復する面倒より肩の荷がないほうがいい。

アヤモンテの港界隈の歓楽街。昼日中のこういうところはウツロ。カルナバルの電飾に灯が点る頃にならないと元気がでないか、バルもこの辺のは夜の営業だけ。

こんなところを散歩しながらバス駅に行きました。ソコには成る程コイン・ロッカーはありました。けれどもどうしても使えません。いつか前にもお話ししたと思いますがスペインのコイン・ロッカーは小銭を直接入れるのではなく、まず、特殊な溝を刻んだ小さなコインを自販機で買わなくてはなりません。

この自販機がどうしても言うことをきいてくれない。殆どの小銭が素通りしてしまうんですが、たまには引っかかる小銭もあって、どうやら規定の３ユーロ入ってヤレヤレと思ったらそれっきり、コインもでてこないし、小銭も帰ってきません。

返却ボタンもないんです。私達が四苦八苦していると、切符売り場が開くのを待っていたオバサンがドレドレと手伝いに来てくれましたが、オバサンだって妙案があるわけではなく結局小銭は取られっぱなし、荷物は肩に、のまま。

駅には係員は誰もおらず、苦情を言う相手もいません。その時は運悪くバスの発時間の谷間だったんですね。そういう時間は出札口も閉めてしまって係員はどっかへ行っちゃうんです。コレもスペインのバス駅では良くあること。むしろ当たり前。

憤懣やるかたなくもう一度観光案内所へ引き返しました。３ユーロはともかくリュックを背負って往復小一時間の無駄をどうしてくれる。ココは一番、トクと苦情を言って、今後観光客が同じ目にあわないようにしてやらねば、と思いました。

案内所には例のオニーサン。またカイナとも言わずニコヤカに迎えてくれました。これまでの二回は、地図を貰ったりバスやフェリーの時間を聞いたりですから、たどたどしくスペイン語で何とか用は足りてたんですが、文句を並べるとなるとスペイン語じゃラチがあきません。英語でイイネと念を押した上、一件をひとくさり。

オニーサンはおとなしく、且つ申し訳なさそうに聞いていましたが、では、これに書き込んでくださいと苦情処理票とでもいうものを取り出しました。こんなもの初めて見ましたねー。その存在すら知らなかった。英語でプリントしたこんな書類があるということは、それだけ観光客の苦情が絶えないということか？　私達はこれまで少々の不都合があっても、しょうがないソレがスペイン、と諦めてしまっていたけど、ドイツ人やイギリス人がそんなにあっさり引き下がるわけないモンね。しょんぼりしてしまったオニーサンには悪いけど、言うだけ言ってコッチは少しすっきり。

それで思い出しましたが、ずっと前にカァディスのバス駅の待合所で、イギリスの大学生らしい女性に話しかけられました。公衆電話を使おうとしたんだけど、電話はかからないし、小銭も返ってこない、どうしたらいいか、と言うんですね。

その時、私達も鉄道駅のやはりコイン・ロッカーで小銭をタダとられたばかりの時だったので、その話をして、気の毒だけど仕方ありませんよ、といいました。しかし、彼女はトテモそんなにあっさり諦めがたいらしく、アンビリーバブル！！ と柳眉を逆立ててオリマシタ。ピレネーのアッチの人たちの反応としてはゴク当たり前だったんでしょうが、私達はピレネーのコッチにいるんですからね。そうそう「ピレネーの」という言葉「向うは地獄」と続くんだと思ってましたが最近になって「向うはアフリカだ！」が正しいことを知りました。ナポレオンが言ったんだそうです。ナットク。

上はアヤモンテの市街地の中で一番高いところから河を挟んでポルトガルを見たところ。AYAMONTE の AYA はイベリア語、MONTE はロマン語の MONTI が語源でどちらも山または丘を意味するのだそうです。私達が立っているここは山というほどの高さではありませんが、周りは一面の平原ですから見通しは３６０度極めてヨロシイ。

さて、バス駅まで行ったり戻ったり、坂を上ったり下ったりしたのでハラもすいてきました。何しろリュックは背負ったままですからね。案内所で預かってくれといえばオニーサンは行き掛かり上預からざるを得ないでしょうが、案内所だってシェスタはありますからね、預けてしまったらバスの出発前に取り返しようがありません。

ところで、私達はアヤモンテで是非食べてみたいものがあったんです。それはラジャ・エン・ピメントン Raya en pimentón (エイの鰭・辛口パプリカ・ソース)です。これがアヤモンテの名物料理で特に冬がいいんだ、と本で読んでいたからです。

往きのアヤモンテで食べに入った店でも注文しました。そこではもう時期が外れたと言われたんですが、諦めてはいませんでした。その時はまだ２月末、テレビの天気予報のタイトルだってインビエルノ(冬)となってます。マリーナや広場に面したトコはどうしても観光客が多く本当に旨いモノはないような気がするので、あえて商店街の裏通りを選びました。街なかの目立たない、こじんまり、こぎれいな店。

店はカフェテリーア・セルベセリーアという看板。カフェテリーアは日本なら喫茶・軽食で、セルベセリーアはもうちょっと重い食事も可能な居酒屋でしょうか。

こういう店はア・ラ・カルタ(一品料理)でも、タパスだけでも、またはちょっとセルベサを引っ掛けるだけでもＯＫの気軽な店。テーブル席もテーブルクロスをかけたところと、ランチョン・マットだけのところ、何にもないところの三種類。注文するものによってテーブルも変わります。

入ってまず、カマレロにラジャはあるかと聞きました。シ・セニョールといい返事でテーブルクロスの席に案内されました。ヤレヤレやっとありつけるかと思いきや、調理場から戻ってきた彼は、すみません、今日はラジャが入ってなくて・・・。

メヌーを見たけどこれと言って気を引くものはなく、じゃあ、タパスにしよう、と言うことでランチョン・マットへ移動、格下げ。結局ラジャは食べ損ねたけど店の選択は悪くありませんでした。食器も清潔だったし(重要)、カマレロも良かった。

私達が食べたのは上の六種類のタパス＋ビィノ・ティント。上段：左は片口イワシのニンニク・ソース。右、小エビ衣揚げ。中段：左は子牛の煮込み。右はマグロのハーブ煮。下段左はガリシア風茹蛸。そして右はご存知ハモン・セラーノ。これはパタ・ネグラといって最上級黒豚イベリコ種のもの。この手切りのウスウスがいいところ。ランチョン・マットのアルボラーダ Alborada が店の名前で「暁」という意味。スペインの西のハズレにあるんだから暁より「黄昏」が似合わないか？　景気悪いかな？

それにしても、思いっきり野菜不足ですね。これでも普通のタパスに較べると大奮発なんですよ。ごく普通のタパスというと、カスエリータと呼ぶ直径１０センチくらいで茶色・厚手の直火にもかけられる皿に盛って出すのが普通です。この店では普通の皿に少量の野菜やフライド・ポテトなども添えて出していて、タパスとしてはむしろ異例。添え物一切ナシのタパスよりはマシだけど色気のない盛り付けですね。

私達はソトメシで野菜を食べるのはとっくに諦めています。勿論サラダはどの店のメヌーにもありますが、高いばっかりで私達の普段の野菜摂取量からすればナイに等しい量ですからね。この日、夕食はウチでだからその時ヴェジタリアンになればイイヤでサラダはなし。ファーロでは野菜サラダを食べましたがあれは安かったから特別。

さて、この中で何が一番だったでしょう？　料理人には悪いけど、ハモン・セラーノが飛び切りでした。これだけはどんなに腕によりをかけてもウチでは作れないですからねー。ビィノ１本の昼酒がきいて、セビージャまでのバスは殆ど夢の中。＊＊＊

「のんべのメンコ」の巻

スペインへの移住が決まった時、何が楽しみだったかというと、ナマのフラメンコでも名所旧跡でもなく、ましてやピカソの絵でもなく、安くて旨いビィノでした。勿論フラメンコも観光名所も美術館もそれなりの関心はありましたが、ソレはソレ。何しろビィノは毎日のことですからね。名画じゃハラはふくれません

スペインのワインの安さはカナリー諸島のトマト運びをやっていた頃、スーパーで見てビックリしたものです。ワインの安いことではオーストラリアや南アなんかも負けていませんが、チリやアルゼンチンなどスペイン語圏の安さには及びません。勿論本国スペインだってそれ以上でも以下でもありません。

スペインに来た当初は、よしスペイン・ワイン全種目制覇してやろうじゃないの、と思いましたがコレはすぐ諦めました。到底無理ということがわかったからです。だって一つのボデーガ（醸造所）で何種類ものランクの違う銘柄を造っているし、同じ銘柄でも収穫年によって全く別物とも思えるものになるからです。

モウ一つ大事なことは値段。大部分は私達にも手が出せるユーロの一桁ですが、何十ユーロ、中には百ユーロをこすようなものもあって、トンデモナイそんなの呑めるワキャーネーダロ、とコレはあっさり却下。そして、呑むほどに、日がたつほどに晩酌に常用するのは３ユーロ以下で充分だという結論に達したのです。

実際５ユーロ以下の価格帯では、旨いまずいは所詮味の好き嫌いに落ち着いてしまいます。１ユーロ台でも、ウン、こりゃイケル、というのもあるかと思えば、５ユーロでも、なんじゃコリャ、というのもあるという具合。そこで、我が家の常用晩酌価格帯を３ユーロ以下と設定して、暫くはその範囲内で買って充分満足していました。

けれどもその内、或ることに気がつきました。例えば２ユーロのを１本、４ユーロのを１本同時に買えば３ユーロ２本買ったのと同じですね。同様に２＋２＋５でも２＋２＋２＋６でもＯＫ。コレでバリエーションは大幅に広がりました。それでもまだまだ、見たこともないようなラベルが次々に見つかります。

これは３月１５日現在のコルクの山。この時点で７９９個ありました。我ながら、呑むにも呑んだと思いますが、実際はアト少なくても４～５０個はあった筈。抜く時割れてしまったものや、ソトメシで呑んだものもありますからね。

スペインへ来てから３年と５ヶ月、その間２ヶ月は日本に帰っていましたから、正味３年３ヶ月、３０×３９で、ざっと１１７０日。厳しく桂馬呑み休肝を守っていますから１１７０×２／３＝７８０。７９９個に殆どぴったりでしょう。ほんとは、来てから暫くは休肝日なんかなしで突っ走っていましたし、来客なんかの時は当然１本では足りません、だから７９９＋４～５０でも丁度勘定が合うんです。

それで、何銘柄呑んだか？　これははっきり記録してあって、赤３２２、白が７１でトータル３９３種。最近はもうこの数を延ばす気は無くなって、過去に呑んで良かった安全牌を選ぶ事が多い、しかも殆ど赤、魚でも赤、刺身じゃありませんからね。

ところで、何でこんなものをとってあったか？　初めの数個はなんとなく、だったんですが、ある日、その頃よく行っていた蔵元直売のワイン屋の壁に、このコルクをスペインの地図にビッシリはめ込んだものを見たんです。ヨーシ俺もなんか作ろう。

カァディスへ引っ越してからの目標はベランダのウッド・デッキでした。コルクを立てて並べて表面をならせば裸足の足に心地よいウッド・デッキになるはず。でも残念ながら少なくても１０年は掛かると判明。だから今のところはタダのメンコ集め。

もう一つのメンコがこれ。ビール会社がキャンペーン・セールに使うロゴ入りコパ。ここに並んでいるのは１８種類ですが、コレも何個かは割ってしまったので２２～３はあったはず。こういうコパ（足つきグラス）は殆どがベルギー、オランダ、ドイツのものでスペインのものはこの中で一つしかありません。

スペイン暮らしの嬉しいことの一つはこれらのビール王国、ＥＵの北の国の旨いビールが安い値段で呑めることです。上記三国の大部分のビール、３３０～５００ｍｌを２００円以下で売っています。コパ付きの４本組みまたは６本組みの箱はクリスマス頃に売り出されることが多いんですが、どういうわけかスペインの人達はこういう箱入りのビールをあまり買わないようで、大抵売れ残ったまま２月に入ります。

２月になると毎年カルナバルの時期に大売出しがありオフェルタ(お買い得)が店頭に目白押しになります。そして売れ残ったコパ付箱詰めビールもバカ安になります。

今年も元値２３ユーロを８ユーロとか１２ユーロのを５ユーロとか５ユーロのを２ユーロで買えました。このセールは私達のお気に入りスーパー、デパート直営のＣＯＲのなんですが、不思議なことにこんな捨て値になってもまだ殆ど売れないんです。

買うのは殆ど私達だけみたい。どうもスペインの人は自国の薄味のセルベサだけがお好きらしい。特にベルギーなどの濃い味のビールはお呼びでないのでしょう。

まあ、スペインのセルベサは安いものでは３３０ｍｌが３０円以下ですからねー。暑い時に清涼飲料として呑むなら悪くないでしょうが、私達はチョット・・・。

というわけで、私達は専らベルギー、オランダ、ドイツの濃い味のビールに浸っています。特に小麦麦芽のビールがお気に入り。例えばこんなもの。真ん中の La Trappe というオランダのビール以外は全部ドイツの小麦麦芽ビールです。日本でもデパ地下なんかへ行けば見かけるロゴがあるでしょう？

参考までにチョット私達の買値を言うと、この中で一番安いのが左端の小麦麦芽ビール Löwen Weiss ５００ｍｌ、５．２％、８５センティーモス(約１２０円)。一番高いのが真ん中のオランダビール TrappistenBier といってますから修道院ビールですねこれが３３０ｍｌ、８．０％、２．１８ユーロ(約３０５円)、勿論こんな高いビールは常用ではありません。常用の限界は左端のレベルまで。左端のものと同じロゴで青い缶のものは日本でもおなじみだと思いますが、白い缶のこの小麦ビールはこっちで初めて見たものです。今は日本にもありますか？　こんな値段から較べると日本はワインもビールも高いですねー。そのうち日本へ帰ったらどう仕様もないですねー。ビールは奥の手の自家密造酒でまかなうとして、ビィノはどうする？　いやいや、魚は旨い刺身が自前で釣れるんだから、呑むのはチューでいこう。酒は風土だ。＊＊＊

「冬から初夏へ」の巻

「アンダルシィアには６ヶ月の冬と６ヶ月の地獄がアル」という言葉があるんだそうですが地獄はともかく、どうやら早くも夏の気配が感じられる今日この頃です。

３月１０日。先週のアップロードの日、今年初めてツバメを見ました。ツバメではなく別種の鳥だ、という人もいますが、私達の目にはツバメとしか見えません。

３月１１日。テレビでは「鳥の歌」あのパブロ・カサルス Pablo Casals の名曲が終日流れていました。マドリードで起きた連続爆破事件オーンセ・デ・マルソの犠牲者の追悼式にこの曲が使われているのです。深く静かな悲しみをあらわすにはまたとない素晴らしい曲だと思います。いつか日本に帰ったら、サイレント・チェロを手に入れて、この曲、一曲だけを弾けるようになりたい、そう思っているんです。

３月１２日、日曜日、浜には突然夏がやってきました。真冬でも泳ぐ酔狂な人はいますが、この日は正真正銘、強い陽光が照りつける夏の陽気になったんです。

砂浜には今年初めてのパラソルの花が咲きました。あちこちにビーチ・チェアー持参のひとも出てきています。ビキニもトップレスもちらほら。人数こそまだ少ないですが、これからは日曜日ごとに増えてくるのでしょう。

３月１３日、月曜日。ついにポリシア・ロカール(市警察)も夏に備えました。ウチから１００m足らずの遊歩道の浜側に市警の海浜派出所がありますが、冬の間は完全に閉鎖してあったのを開けたんです。同時にサンドバギーに乗った警察官の砂浜パトロールも開始です。去年はこの時期から私達は一時帰国して不在でしたから、これから５月末までの浜の変化の様子は知らないのです。

カルナバルを春の祭りというイメージでとらえていましたが、実は冬の終わりの儀式だったようです。なぜなら、カルナバル最後の週末４日・５日もその前の週末も大荒れで、冷い雨のぱらつく最悪の天気でした。ところがカルナバルが終わったとたん気温は急上昇、以後雨も全く降っていません。朝起き抜けに居間の温度計を見ると先週明けから１８度以下だった事はなくカルナバル以後は暖房も一切していません。

来週末からは夏時間になります。現在日没は１９時半、夏時間になれば一気に２０時半になってしまい、夏至の頃には２２時直前まで日が伸びます。

冒頭に言った「６ヶ月の冬と・・・」云々はオオゲサとしても、アンダルシィアには少なくてもカァディスには秋も春もないに等しい、とは言えると思います。

去年、１１月半ばに差し掛かってようやく秋らしくなってきたカナと思ったら月末にはもう完全に冬の様相になっていました。今年、２月末にソロソロ春景色と言ったのに今はモウ日中は初夏といってもいいくらいの陽気になってしまいました。

日本のように梅が咲いて、菜の花が咲いて、桜が咲いて、筍が土を割ってという一連の流れが感じられません。それはカァディスのような人工的半島にいて野に親しんでいないからかも知れないし、私達がスペイン的な季節変化の兆候を知らないからかも知れません。とにかく秋も春もきわめて短いことは確かです。

ところで、１１月半ばに第三次居住許可の更新申請に行った話をしましたね。そして３ヶ月したら国家警察分署に行って指紋押捺をすることになる、ということも。

２月半ばにその分署に行ってきました。ところがまだ本庁(内務省)の許可が出ていないとの返事。「じゃイツ来たら良いでしょう？」「そうね一今月の終わりか３月初め

か」とハッキリしません。そりゃーソーでしょう、本庁の事務の遅れを出先がどうこう言えるモンでもありませんからね。で、３月に入ってすぐまた行きました。マダだめ。半ばになってまたまた行きました。マダマダだめ。

サスガに向うもこう何回も来られちゃカナワン、と思ったのか、メモに電話番号を書いて「今度はここへ電話して聞いて下さい」モウ来るな、とは言えないよナー。

ソレニシテモ、何たる非能率。もっとも、別の県に住む知人は６ヶ月後に来なさいと言われたそうですから、案外ソレが正解かも・・・。そして、その人は申請書類でも随分苦労させられたようです。年金証書のスペイン語訳が古いから新しく認証されたものを出せ、とか、別の係官には預金残高証明を出せとか言われたのだそうです。係官によって言うことがマチマチなんですね。

私達はそういうことは全く言われなかった。これが各県で出す許可なら県によって扱いが違っても仕方ありませんが、居住許可は内務省が出すものですよ、県ごとで違う筈がない。その代わり私達にはこんなことがありました。

申請書類はこんなもんで良いですかと、お伺いをたてに行った時はＯＫだったのに、イザ書類をそろえて提出に行ったら、パスポートのコピーは全頁のを出せと言われてしまったのです。そして全頁のコピーをとって出直したら、パスポート原本との照合もせずにすんなり受理。原本との照合をしないんなら全頁のコピーなんて全く無意味ですよね。写真と名前が入った頁以外は誰のものかコピーでは不明なんだから。

３回行って３回とも全部別人。要するに厳正であるべきお役所でも、係官一人一人が個人的感覚で勝手に規則に味付けしてしまうとしか言いようがありません。こんないい加減なことで申請を却下されたら泣くに泣けませんね。

そして、私達の居住許可はモウとっくに１月半ばで切れてしまっているんですよ。まあ、申請受理のスタンプは貰っているんだから不法滞在ではないけれど、犯罪を犯さない限り、どこからも誰からも居住許可はどうなっているか？と調べられることはありません。気楽なモンですね。これだもの密入国者の群れが後を絶たないわけだ。いったん入ってしまえばコッチのものという感じが濃厚です。

日本の運転免許証更新を思い出してみてください。１ヶ月前から申請を受け付けて、切れる前後にはたいてい新しい免許証を手に出来ますね？　人数だって居住許可申請

者とは比較にならないのに。なんともはや、この国のお役所事務は絶望的としか言いようがありません。日本の会社からビジネスでこの国へ来ている人は大変だろうと思います。この国のペースを知らない日本の本社ではヤイノヤイノといってくるだろうし、コッチでは国中殆ど全てがこんな調子でしょうからね。

どうも、最近スペインの悪口ばかり言うような羽目になっていますが、事実少しウンザリしている部分があることは確かです。けれども、この国の気楽さ、暮らしやすさはソレを補って余りあることもまた真実です。あと半年か一年、大いに楽しんで帰りたいと思っています。ウンの落っこちていないニッポンへ。

では、最後に私達がスペインに来て良かったと思うことの一つ、部屋からの落日の様子をご覧下さい。夏の間は、時々刻々変化するコレを見ながら外での晩酌です。

¡Muchas gracias amigos!

さて、みなさん、長らくご愛読いただいたＨＰ「カァディスからの手紙」もこれでオシマイです。長い間お付き合い頂いて本当にありがとうございました。

私達は早ければ今年の秋、遅くても来年春にはここを引き払うつもりです。まだはっきりどうするとは決めていませんが、本来なら１０月１５日の賃貸契約更新日までに部屋を空けるか又は丸１年更新するかですが、とりあえず大家サンには契約の半年間だけの延長を申し入れようと思っています。それが可能かどうかは判りません。

なお、前号でもお知らせしましたが、「カァディスからの手紙・続編」をメールで発信しようと思っています。ＨＰにアクセスするしないは見る方が選択できることですが、メールの送信はこちらからのオシカケになります。従ってこのメールは「送れ」というお知らせを頂いた方のみに宛てて送信することに致します。例外はありませんので、どうぞお間違えのないように・・・。

お知らせはＲ宛てでもＮ宛てでも結構です。また、メール版・続編の開始は一応４月半ば頃と考えていますので、早めにお知らせを頂けるとうれしいです。

では、みなさん、さようなら、ごきげんよう。またお会いできる日まで・・・。

¡Adiós amigos, Hasta la vista!

２００６年０３月１７日　カァディスにて　ＲｙＮ